

# 罪とゆるし

——『カラマーゾフの兄弟』を読む——

(後編)

井田俊隆

## Abstract

This is the paper of a literary lecture for students at Ritsumeikan University. We read F. M. Dostoyevsky's work, *The Brothers Karamazov*, and looked into Dmitry's way of life, analysing his subconscious frame of mind. He leads an abnormal, roguish life and ends up being suspected of murdering his own father. At great cost of social failure he is awakened and eventually led to a blissful absolution. What is true about life — this is what I tried to impart to students through focusing on the hero.

**Keywords :** 潜在意識 (the subconscious), 罪 (crime), 天使と悪魔 (angel and/or devil), 罰 (legal punishment), ゆるし (absolution)

## グルーシェンカ

### グルーシェンカの経歴

今日の話はグルーシェンカからです。前回のカテリーナの場合と同様、ドミートリとの関わりのなかでこの女の実像に迫ってみたいと思います。そして最終的に、これらふたりの女はドミートリに何をもたらしたか、その辺を考えてみます。

グルーシェンカは元娼婦で、今は金貸しのようなことをしています。これだけで、人の道を外れた生き方をしている女だということになるわけで、カテリーナの高徳な生き方とは対称的です。カテリーナが神の教えに従順であったのに対して、グルーシェンカはその埒外にある悪徳の女です。

ところが、ドミートリはこの女の虜になってしまいます。どうしてか。これは理屈ではありません。あり体に言えば、グルーシェンカの魅力に参ったということでしょうが、そう言ってしまうと身も蓋もありません。やはり彼女に何かがあったのではないか。婚約者カテリーナに人間の真実（つまり本物）を見つけられなかったのとちょうど正反対に、ドミートリはグルーシェンカの中に何か真実を見つけていたのではないか。そのように思われます。

もちろんその場合でも、ドミートリはそういうふうにはわからない。とにかく、よくわからないけれども、何か共鳴するもの、そういうものがグルーシェンカといっしょにいると実感できるのです。彼の直感、つまりあの犬のような嗅覚、それがグルーシェンカの本物性を嗅ぎつ

けるのです。

こうして彼はカテリーナからグルーシェンカへと心が移っていき、ますますグルーシェンカにのめり込んでいくのです。しかし、のめり込んでいきはするが、最後のところでは、これはやっぱりまちがっているのではないか、過った方に自分は向かっているのではないかと思うのです。彼なりに理屈が働くわけです。だから、前回資料1のところの説明しましたように、自分が天国に向かっているのか、それとも地獄に向かっているのか、そこがわからないと言って、苦しみます。しかし、根が実感の男ですから、理屈がどうであろうと、真に心を震えさせる感動はうち消せません。魂の本然の欲求の前には理屈など、じつに非力です。ですから、これが地獄への道だとしても、それならそれでいい、いっそのことまっ逆さまに墮ちてやると言って、やっぱりグルーシェンカにのめり込んでいくのです。

前置きはこれくらいにして、このグルーシェンカという女はいったいどんな女なのか、くわしく見ていきましょう。

グルーシェンカは17歳の時まで娼婦をやっていて、あちこちの町をうろうろしていたのですが、普通の娼婦として片づけてしまうことができない何かをもっている女です。ちょうどその頃、あるポーランド将校と知り合います。将校も何かとやさしくしてくれて、命がけの恋をするのです。しかし結局は捨てられてしまいます。そして失望のあまり身投げをしようとするのです。これがそもそも娼婦的ではありません。

それで、身投げをしようとした時、たまたまサムソーノフという老実業家に命を助けられます。その後、この老人の庇護のもとになんとか生きる気力を取り戻して、立ち直るのです。サムソーノフは老人でもあるし、何か汚い魂胆をもっているわけではありません。むしろ、わが娘のようにグルーシェンカをかわいがってくれます。

そうこうして、ポーランド将校の噂が聞こえてきます。彼は自分を裏切って、故国ポーランドで妻を迎え、子をもうけ、安楽な生活をしているというのです。それを知って、彼女は裏切られた悔しさというか、復讐心のようなものに燃えるのです。そして、サムソーノフと組んで高利貸しのようなことを始めます。慈悲とか憐れみ、そんなものをいっさい踏みにじって生きるわけです。ですから、世間からは鉄の鎧を着けた女とか呼ばれて、冷たい視線を浴びるのです。カテリーナの高徳な生き方と比較しながらこの辺のグルーシェンカの場面を読むと、対照が際立って、とても迫力があります。

もちろん、彼女は今は娼婦なんかしていません。だれひとり心を許す男をもたず、ただ一人で生きていくのです。しかも、この頃の彼女は17歳の頃のようなひからびた、みすぼらしい少女ではなく、サムソーノフに大事に育てられて、輝くばかりの美しさをもっています。しかし、元娼婦、鉄の鎧を着た女高利貸しということで、世間でいい風評が立つはずがありません。無慈悲でいかがわしい女、とにかく毒々しい匂いのする悪い女、そんなきわめて不名誉なレッテルが貼られているのです。

### ポーランド将校とドミートリ

こうしてグルーシェンカは世間から白い目で見られながら五年の歳月が流れるのですが、そうしたある時、例のポーランド将校から、ぜひ再会したい、いつの日どこそで待っている

から会いに来てくれという便りが舞いこんでくるのです。そして、ちょうどヒョードル殺しのある晩、隣町のある旅籠まで彼女はポーランド将校に会いに行くのです。

この時、グルーシェンカは自分でも自分の気持ちがよくわからないのです。将校に会いに出かけて行くには行くが、彼に復讐をするために、つまりせめて心理的に復讐できればと思って会いに行くのか、それとも彼に会って、この際自分の気持ちを整理したいと思って行くのか、よくわからない。将校が憎くてしょうがないのはたしかなのですが、やはり、この五年間自分の心を占めていたのはこの将校だけだ、自分はこの時が来るのを待っていたのだと、とこういう気もするわけです。

いずれにしても、彼女のこの五年という歳月を支えてきたのはポーランド将校だったのです。それが憎しみだったのか愛であったのかはともかくとして、彼女の心の中には依然ポーランド将校がいたわけで、表面的にはその間いろいろ言い寄ってくる男どもに適当なことを言って相手をしてはいますが、心の底ではそういう意味での貞操を堅く守っていたのです。

そんなところへポーランド将校から会いたいと言ってきたわけですから、自分の気持ちがよくわからないけれども、とにかく飛んで行くわけです。そして、彼に会い、カード遊びをしたり、いろいろな話をしたりして何時間が過ぎるのですが、深夜になって、その再会の席へいきなりドミートリが血相変えて入ってくるのです。その顔は真剣で、目は異常に輝いている。そのドミートリの姿を見て、グルーシェンカはすべてを悟るのです。何を悟ったか。それをこれから説明するのですが、それには話を少し戻さなくてははいけません。

とにかく、ドミートリはグルーシェンカにずっと熱をあげています。一方、おやじのヒョードルの方も息子に劣らずグルーシェンカに熱をあげています。おやじの方は金で彼女を釣ろうとします。それがおやじのやり方なのです。ドミートリは金なんか無い。真心というか押しというか、こっちはとにかくぶっちゃんけたやり方で猪突猛進です。こんなふうにはライバル意識を丸出しにして、父子でなすこのみにくい争いをドストエーフスキは魂と魂のすさまじい衝突という次元で読者を惹きつけていきます。

このように二人は激しい火花を散らし合っているわけですが、当のグルーシェンカは二人をぜんぜん問題にしていません。高利貸しのようなことをしていますが、算盤をはじきながら男を抱くようなことは彼女にはできないのです。そういう娼婦的な器用さは彼女にはありません。ヒョードルやドミートリを相手に適当に遊んでいるように見えるけれども、彼らを一步も近づかせません。手にも接吻を許さないというくらい貞節なのです。

さてこの夜、ドミートリは、グルーシェンカの昔の恋人が彼女に会いに来ているということはもちろん知らない。ただライバルはおやじだと思っています。近頃ではドミートリは片時もグルーシェンカのそばを離れられなくなって、グルーシェンカにしてみればずいぶん迷惑な話で、どこへ行くにもドミートリがついて来て離れないものだから、グルーシェンカは仕方なしに、ポーランド将校に会いに行くのに、一時姿をくらまします。それでドミートリは、これはもうまちがいない、おやじのところへ行ったらちがいないと思いこんで、血相変えておやじの邸にすっ飛んで行くのです。そしておやじの部屋の窓の下の茂みに隠れて、グルーシェンカが来ているかどうかを確かめようと室内を窺うのです。

しかし、どうも来ている様子はない。それでも、あの屏風の陰に隠れているのかもしれない

とか、もうベッドに入っているのじゃないかか思いながら、じっと中を見守ります。とにかく最後の確証が得られないと落ち着けないというくらいドミートリはせっぱ詰まっているのです。

そうしているうちに、この家の召使いのグレゴリーに見つけられそうになって、あわてて逃げ出します。逃げるものだから、グレゴリーもあやしいやつだということで追いかけ、もみ合いになります。それで、ドミートリは手にしていた杵でグレゴリーをしこたま叩きつけ、大げがをさせるのです。ところで、この杵ですが、ドミートリはもう嫉妬や憤りで気が転倒しており、おやじを殺そうと途中の民家からはずみで掻っ払ってきた杵ではありますが、これが後に裁判でドミートリのおやじ殺しの証拠のひとつになるのです。

ついでに触れておきますと、庭でのこのドサクサに紛れて、じつは屋内では何者かによってヒョードル殺しが進行しているのです。もちろん作品はそれと判るようには書いてありません。読者にはドミートリが犯人かもしれないと思わせるように描かれています。

ともかく、ドミートリはグレゴリーに大げがをさせ、自分も血みどろになって逃げて行きます。そして途中グルーシェンカの家に寄って、召使いの女から、グルーシェンカが今隣の旅籠で昔の恋人に会っていると聞かされて、ぼう然となります。

ドミートリはポーランド将校のことはぜんぜん気にとめていませんでした。ライバルはおやじだとばかり思っていたのです。それが今、グルーシェンカが昔の恋人のところに行っていると聞かされて、もはや自分は死ぬしかないと思います。

彼はグルーシェンカとポーランド将校のことは知っていました。しかし、それは昔のことで、そんな昔の恋はもうグルーシェンカの心から消え去っていたかと思っていました。ところが、その好き合った者同士が今会っているというのだから、もう自分の入り込む余地はないと思うのです。まして、召使いのグレゴリーを殺してきたかと思っています。グルーシェンカが自分のすべてであるのだから、そのグルーシェンカを失うことはすべてを失うことであるわけだし、その上自分は殺人の罪を負ってしまったかと思っているわけで、自分はもうこれ以上生きていけないと観念するのです。

それで、せめてひと目でいい、最後にグルーシェンカに会ってから死のうと思って、ピストルに弾を装填して、グルーシェンカとポーランド将校のいる隣の旅籠に向かいます。そして、先ほどのところに話が戻って、二人の再会の部屋へ血相変えて飛び込んでくるのです。

さて、この時のドミートリの姿を見て、グルーシェンカは何を悟ったかということでした。

ここは真に迫る場面です。かつてはいざ知らず、今では恋心のかけらも見られない世間ずれしたポーランド将校が片方にいます。そしてもう一方に、自分のことでまるで気がいなくなったドミートリが血だらけになってつつ立っています。これを見て、グルーシェンカははっとします。この人にこそ愛の真実があるのだと気がつくのです。というか、はっきりと目が覚めるのです。

妻が死んだからといって、昔捨てた恋人のところへのこのこやって来るような身勝手な考えのポーランド将校がみすぼらしくも見え、その卑しさに彼女は吐き気さえ覚えます。こんな男のためにこの五年間自分の心を費やしてきたのかと思うと、もう顔も見たくないという気持ちになります。一方、ドミートリの方は自分のような値打ちのない女に対して命すら惜しくない

というような目の輝きをしています。そして、この人こそ真実愛すべき人だと目が覚めて、ドミートリに永遠の愛を誓うのです。

ドミートリはまたもやあっけにとられて呆然とします。今までどうしても自分のものにできなかったグルーシェンカが今自分のものになるというわけですから。しかも、グルーシェンカの方から自分に永遠の愛を誓うというわけです。彼はグレゴリーを殺したと思って、その罪の償いに死ぬつもりでいたのに、こうなるととも死ねそうになくなります。

こうして、ドミートリは事の意外な成り行きにあっけにとられているわけですが、ちょうどそこへ警察が来て、彼は父親殺しの容疑で（グレゴリー殺しではなくて）逮捕されてしまいます。グルーシェンカの方も、ポーランド将校への幻想から覚めて、やっと真実愛する人が見つかったとたんに、その相手が殺人容疑で拘留所送りになるという運命の皮肉に見舞われます。が、彼女はこの時ははっきり、たとえシベリアの奥地まででもドミートリについて行って、最後まであなたに添いとげると言います。

### グルーシェンカの真実

以上、グルーシェンカという女を具体的に追ってみたのですが、それをふまえて彼女の真実というものをここでまとめてみましょう。

彼女の心の真実というのは、表面の実生活とは別に心の奥にだれにも踏み込ませない領域をつくって、それを真珠の小箱のように大事に守るといった、そういう真実ではありません。外側は外側で適当に生きて、心の底では真実を生きるという生き方ではありません。

彼女には外側も内側もありません。自分はほんとうにどうしたいか、真実どのように生きたいと思っているのか、彼女の中にはこういう希いがあるだけです。彼女はつねにこの心の希いをしっかり見つめているのです。それで、こうしたい、こう生きたいと思った時、もっと適切に言えば、こうとしか生きられないと思った時、それを懸命に生きるのです。外側・内側は関係なく、自分のすべてを出し切って生きていくのです。だから彼女は道徳とか社会規範とかに少しも縛られません。ただ、どう生きたいか、これが彼女の生きる規範なのです。グルーシェンカにとっては、真実に生きるとはこういうことなのです。

17歳の少女が娼婦として陰惨な生活をしてきたのです。遊ばれて捨てられて。普通の娼婦ならそれで終わります。世の中なんてそんなもんさ、というふうになります。つまり人生に一所懸命になれなくなって、投げてしまいます。しかしグルーシェンカにはまっすぐな心、高潔な魂があって、墮落できないのです。

ほんとうに心の希いが自分の中に起これば、そのまま男を真剣に愛してしまう。それで、捨てられたとわかると、今度は自殺へと突っ走る。恋も自殺もかけひきなしに全身全霊をもって生きるのです。

自殺は成功しませんでした。それでどうしたかと言いますと、今度は激しく憎むのです。復讐です。これだって、どうしたものかと迷ったり、選択の余地を残したものではありません。もう決まっているのです。自分はまだ恋をしているのに一方的に捨てられたわけですから、憎むより外ない。それも中途半端な憎み方ではない。自分の体も心も踏みにじった相手をそれからの5年を費やして懸命に憎んだのです。

一時的に憎むというのはだれにでもできます。しかし、これほど一所懸命憎むというのはだれにでもできるものではありません。やはり、これは魂の高さなのです。憎しみというのは愛の裏返しであるわけで、彼女がポーランド将校を愛した魂の高さ、それがそのまま裏返した形で彼を憎む時の魂の高さであったのです。

ここでちょっと念を押しておきたいのですが、このようにグルーシェンカは復讐によって生きたという、まるで自分というものがなくなってしまったように聞こえるかもしれませんが、むしろそうではありません。彼女はいつでも自分を生かしていたのです。恋をした時だって、ポーランド将校の方はともかく、自分はほんとうに恋をし、自分を生かしていました。今度は憎しみという形でポーランド将校に愛をつなぎ止めながら、自分を生かしていたのです。つまり、彼女は一時も空疎な人生を生きたことはないのです。いつでも、たとえ歪んだ形ではあっても、自分の恋を精いっぱい生きてきたわけで、だから、自分というものがなくなるということとはなかったのです。

こういうグルーシェンカですから、彼女はほんとうの愛というものがどういうものかをいちばんよく知っています。だから今回、ドミートリが血相変えて飛び込んできた時、その血走った目とか顔を見て、彼がどれほど自分に真実の恋をしているかがわかるのです。つまり、自分の恋がそうであったように、ドミートリは今この恋によって生きているということ、それが地獄であろうが天国であろうがそんなことはどうでもいい、とにかく愛というものにすべてを出し切って生きているということ、それがひと目でわかるのです。そして、これこそ自分がほんとうにほしかったものだったのだと感動します。反対に、自分は今まで何をしてきたのかと衝撃を受けます。片方に坐っているポーランド将校を見て、魂というものがなくなったもぬけの殻のようなこんな男のために5年もむなしく過ごしてきたのかと思います。つまり、捨てるべきものと得るべきものとははっきり見えたということです。

グルーシェンカという女は要するに人間の魂だけをずっと見つめてきたのです。魂のほんとうの姿（つまりは本物の人間の姿ということですが）、それだけをまっすぐ見つめてきて、それを今ドミートリに見つけたのです。こうなると、ドミートリが殺人犯であろうと、それは何の支障にも迷いにもならない。それで、シベリアの果てまでもついて行って、最後まで添いとげますと言うのです。

念のために、ここでもちょっと注意してほしいのですが、こう言ったからといって、グルーシェンカはカテリーナのようにドミートリに献身的になったということではありません。ドミートリを何とか精神的に救ってやりたいとか、そんな殊勝な気持ちは彼女にはありません。そうではなくて、ドミートリといっしょにいたい、ただそう思っているだけなのです。それが自分のほんとうの希いに従って生きることであり、そしてそれが自分を生かすことになるからです。

以上、少々くどくなりましたが、グルーシェンカの真実の生き方を追ってみました。人間だれしも、こうしたい、こう生きたいという希いをもっています。その希いに忠実に生きることがいかに尊いかをグルーシェンカは教えてくれているようです。たしかにこういう生き方は現実にはむずかしい。むずかしいだけに、多くの人間は、意識的であろうと無意識的であろうと、それに目をつぶってしまいます。そうするとどういう生き方になるか、それがカテリーナの生

き方なのです。そのカテリーナはじっさいドミートリとの関わりの中でどんな行動をとるか、前は彼女の全体像を見てみましたが、今度はその実際の行動を見ていきます。心の真実という点で、今見てきたグルーシェンカとは対称的な生き方が際立ってくると思います。

### カテリーナ、ドミートリを試す

カテリーナはドミートリの心がグルーシェンカに移っていることをかねてから疑っています。それで、ドミートリを試すためにある行動に出ます。ドミートリに3000ルーブルの現金を渡して、いつでもいいからこれをだれそれのところへ送金してほしいと言うのです。ドミートリはこの金がほしいに決まっていると踏んでいるのです。捨てた婚約者の金を恋人と駆け落ちする軍資金にすることがあなたにできますか、ひょっとしてあなたならそんな恥知らずなことをするかもしれませんね、と言わんばかりです。しかもそういう本心とは裏腹に、表面は理解深い婚約者の顔をしているのです。

ドミートリは自分が試されているのがわかります。だから頭にくて、その金を受け取るや一晩のうちに1500ルーブルを一気に使ってしまう。ドミートリはけっしてカテリーナが嫌いではないのですが、その高德さというやつがどうにもならなくて、そこへもってきて、今度またこんなふうに分を試すようなことをするから、またもや屈辱を味わあされて、カテリーナに対する憎悪がいつそう膨らむのです。それで、グルーシェンカを連れてある旅籠へ行き、そこでどんちゃん騒ぎをするのです。ジプシー娘らに札束をばらまいたり、とにかく無茶苦茶なことをやって、1500ルーブルをあっさり使い果たしてしまいます。ところがどういうわけか、残りの1500ルーブルは袋に縫い込んで首に巻き付け、ぜったいに使えないようにしておきます。なぜでしょう。

### 名誉の守り袋

婚約者を裏切ってグルーシェンカのところへ走るといのはたしかに無頼漢のすることです。しかしドミートリは、無頼漢であるということは昔からそうであって、今更そのように非難されてもどうということはない。平気なのです。ただ、彼には名誉心があります。自分は泥棒じゃないと堅く信じています。人の金を猫ばばして、それを恋人のために使うとか、おやじのフョードルはいつもそんなことばかりやっているのですが、ドミートリはそんな汚い人間にはぜったいになりたくないと思っています。それで、1500ルーブルは使っても、あとの1500ルーブルを返せば泥棒ではなくなると、こう信じているのです。世間では無頼漢と泥棒のちがいがいなど取るに足りないものですが、ドミートリにはこれは大きなちがいののです。とにかく彼はこうしてその1500ルーブルの布袋を首にぶら下げて、何があっても手を付けないのです。

この1500ルーブルはドミートリにとっては名誉のお守り袋みたいなものです。それに手を付けさえしなかったら自分の名誉が守れるわけですから。ところが、この守り袋であるはずの1500ルーブルが皮肉なことにドミートリの有罪判決の決め手になるのです。

つまり、こういうことです。ヒョードル殺しのあったあの晩のことを思い出してください。ドミートリはグレゴリーを撲殺したと思ひこみ、おまけにグルーシェンカも昔の恋人に会いに行っていると知って、何もかもお終いだ、もう自殺するだけだと観念します。そうなれば、名

誉もくそもないわけで、例の守り袋の1500ルーブルを驚掴みにしながら夜の町をあちこち駆け回ります。町の者もそれを目撃しており、それで裁判で、そんな大金をどうしたのか、おまえは無一文だったではないか、父親の枕元にあった3000ルーブルを盗んだのだらうということになるのです。これは世間ではよくある強盗事件で、だれも疑いを挟む余地がありません。そしてドミートリは有罪判決を受けるのです。

このようにこの大金の出所が裁判の決め手になるのですが、みなさんにはもうおわかりのように、これはあきらかに誤審です。先ほど申しあげたように、その金はカテリーナがドミートリに預けた3000ルーブルです。じつは、この金に絡んで、この誤審にはもうひとつ、決め手になるものがあるのです。わたしたちはそこにカテリーナの恐るべき虚偽を読みとることができます。つまり、カテリーナはドミートリを弁護しないばかりか、逆にドミートリをおとしいれる証言をするのです。

どういう証言かと言いますと、少し話が戻りますが、ドミートリはその預かった3,000ルーブルのことでカテリーナに手紙を書いています。その中に、だれかから借金してでも、ぜったいにお金は返します。もし借りられなければ、おやじを殺して金を奪ってでも、あのお金は返しますというような文言があるのです。カテリーナはこの手紙を証人席で読み上げて、ドミートリの父親殺しの動機を暴露するのです。

ドミートリがおやじを殺してでもと言っているのはもちろん本気ではありません。いや、ある意味では本気なのですが。彼はこういうことはしょっちゅう口にしています。殺意がなくても憎悪がこみ上げてくるとそれが抑えきれないのです。しかし時間が経てば今度はそんな言葉はすっかり忘れてしまいます。それがドミートリらしいところなのですが。

それはそれとして、彼がおやじを殺して金を奪ってやるというのは客観的に言って理由がないわけではありません。だいたいにおいておやじのヒョードルというのはよほど卑劣な男で、ドミートリの母親が死んだ時、幼児のドミートリに相当額の遺産を遺しているのですが、ヒョードルはそれをくすねて、その金でグルーシェンカの尻を追っかけ回すのです。そんな男ですから、ドミートリにしてみたら殺してやりたいくらい憎らしいし、まして、自分の金を猫ばばしたのだから、それを取り返して何が悪いというわけです。こういう父子の間の憎しみや金のいざこざの下地もあって、先ほどのカテリーナの手紙はひじょうに真実味をもったものとなり、ドミートリの父親殺しの動かぬ証拠となってしまいます。こうしてカテリーナは日頃のドミートリへの憎しみから、ドミートリを陥れる証言をして、彼に復讐を果たすのです。

じっさい、カテリーナはこういう汚い行動がとれる女なのです。いくら捨てられた女の憎しみとは言え、そのやり方はとても人間とも思えない残酷さです。言い換えれば、人はそこまでやるのが許されているのかという問題です。これは非常に大きな問題です。

どういうことかと言いますと、カテリーナの証言はひとえに彼女の傲慢さからくるものなのです。日頃の高徳・貞淑という美装の下に隠れていた傲慢さがこういう何かの事件をきっかけにやにわに顔を出し、あんな無頼漢は当然報いを受けるべきだと決めつけるわけです。これは人が人を裁くということに外なりません。人は人をそのように簡単に裁くことが許されているのかどうか、しかも人をそのように傷つけても、自分は少しも傷つかないで平気でいられるものなのかどうか、こうした大問題をカテリーナの証言は投げかけているようです。ドストエー



フスキがこの作品で読者にもっとも訴えたかったのは罪とは何かという問題であったと思いますが、そのひとつの問題提起がここにもあるように思われます。

## 罪とゆるし

### 生きるということ

罪とはいったい何なのでしょう。これをわたしの最後のテーマとしてこれから考えていきたいと思います。これを考えるにはどうしても生きるとはどういうことか、ここから入っていかなくてはなりません。

一口に言って、生きるとは他者に犠牲を強いることなのです。人間も動物も、植物でさえも、他者の犠牲がなければ生きることができないのです。生きるということにはこういう大前提があります。

人間は家畜や魚を食べて生きています。鳥は虫をついばまねば、蛇は蛙を食わねば、生きていけない。植物だって同じです。水やいろんな栄養素を糧として生きているのです。生命を燃やすためにはそれを燃やすべき薪が要するということです。

この世の生きとし生けるものはこういうふうに他者に犠牲を強いているのですが、このことはそれ自体としては善でも悪でもありません。善悪を超えた理、自然の摂理なのです。つまりは自然の姿なのです。ただ、この摂理の受け止め方となると、人間と他の生き物とでは大きくちがってきます。

動物や植物は自然という大きなものに動かされて生きるだけです。つまり、自分が即世界であって、自分と他者を分けることができません。だから、小鳥はミミズを食べても罪を感じません。自然の欲求が命じるがままにミミズを食べているだけなのです。その代わり、人間のようにより以上に殺して食べたりはしません。このように、彼らには罪を意識する余地というか必然性がぜんぜんなく、すべてが当たり前のことなのです。これはこれで救いがあるのですが。

ところが、人間はちがいます。人間は自分が自然の中で生きているということを意識しています。自分を他者の目で見つめる知性というか、そういうものがあるのです。つまり、生きる本体としての自分とその自分を見つめる他者としての自分、こういう両面をもって生きているのです。そうすると、家畜や魚を殺して食べることが当たり前だと思えなくなります。小鳥がミミズをついばんだように、何の意識もなしに生き物を殺すことができなくなります。殺した自分を見つめる自分がふと動き出すのです。これがわたしたち人間の罪意識の目覚めなのです。

しかし、だからと言って、この罪意識のために人間はもう生きていくことができないかという、そんなことはない。やっぱり生きていくわけです。他者に犠牲を強いていることを当たり前ですませられない気持ちと、しかしそれでも生きているかぎりこれはどうしようもないのだという気持ち、このジレンマから人間は逃れられないのです。ここに罪意識というものを背負っている人間の苦しみがあるのです。

### ゾシマ長老

さて、作品に戻って、ゾシマ長老の話に移りたいと思います。この長老もこの作品には欠かすことができない登場人物です。彼はこの町のすべての人の尊敬を集めた修道院の長老で、キリスト教の信仰と慈愛でもってあらゆる人間を、いや、人間だけではない、あらゆる生き物をも包みこむ、そんな聖者です。アリョーシャはこのゾシマ長老をひたすら慕うのです。

ゾシマ長老の若い頃の話をして、彼がまだ少年だった頃のことです。彼の兄が、それまでは結構傲慢で無信仰だったのですが、死ぬ少し前に急に神を思う心情にあふれて、母親と弟のゾシマ少年に向かって、わたしたちは小鳥にもゆるしを乞わねばならない、小鳥に対しても罪を犯しているのだ、その罪の大きさを詫びなければいけない、詫びるといことは愛することだ、すまなかったという限りない心で相手愛することなんだ、とこう言い聞かせるところがあります。

しかし、キリスト教の神髄に触れるような、こんな兄の言葉も少年ゾシマの心にはそれほど大きく反響しなかったと見えて、その後ゾシマは士官学校に入り、将校になります。この辺はドミートリと同じで、喧嘩をしたり、いろいろ不行状を重ねたりで、軽薄な一青年でした。そんなある時、ある男と決闘をすることになります。決闘と言っても、自分の思い人に婚約者がいることがわかって、腹の虫がおさまらず、こっちからいちゃもんをつけるといった、そんな程度の決闘です。

ところがどういうわけか、決闘に出かける前の晩、自分に仕える部下を殴ったり蹴ったりして、荒れ狂います。しかし部下は殺されるほど痛めつけられても、何ひとつ反抗しないのです。そして翌朝、ゾシマは不思議な気分襲われます。自分はこんなにまで部下に尽くしてもらった値打ちのある人間だろうか、ふと思うのです。そして何ひとつ抵抗できないでいる部下の昨夜の姿を思い出して、以前の兄の言葉がよみがえってくるのです。同じ人間として生まれて、どうして片方だけが敬われなければいけないのか、こういう思いがゾシマの心を襲い、人間の罪深さに目覚めます。

この辺をドストエフスキは次のように美しく描いています。ゾシマ長老が昔を思い出してアリョーシャに語る一節です。

### 【資料3】

窓外には太陽が輝いて、木の葉はうれしげにきらめき、小鳥らは、ああ、小鳥らは神をたたえていた。余は両手で顔をおおうや、そのまま床の上へくず折れて、声をあげて慟哭し始めた。そのとき余は兄のマルケールと、彼が臨終のまえ召使いらに言った言葉を思い起こした。『おまえたちはやさしい親切な人間だ。いったいおまえたちはなんのためにぼくに仕えてくれるのだ。なんのためにぼくを愛してくれるのだ。いったいぼくはおまえに仕えてもらうだけの値うちがあるのかしら？』すると、『ああ、ほんとうにおれにそんな値うちがあるかしら？』という考えがふと余の胸中にひらめいた。『じっさい、どういう値うちがあって、おれは自分と同じ人間を、神の姿に似せて作られた人間を、自分に奉仕させているのだろうか？』この疑問が、生まれて初めて、余の心を深く貫いたのである。『お母さん、あなたはぼくの大事な懐かしい血潮です。ねえ、お母さん、まったく人はだれでもすべて

のことについて、すべての人にたいして罪があるのです。人はただこのことを知らないだけなのです。もしこれを知ったなら、すぐ天国が出現するでしょうにねえ！』—『ああ、神さま、これがほんとうのことでないでしょうか』と余は泣きながら考えた。『まったくわたくしは、すべての人にたいして罪があるのでございます。いや、もしかしたら、だれより一ばん罪が重いかもしれません。世界じゅうで一ばん劣った人間かもしれません！』そのとき忽然として、事の真相が余の胸裏にくまなく照らし出された。

青年ゾシマはこれを契機に改心し、神に仕える道を選ぶことになったのです。自分はだれの犠牲においても生きていないという、そういう傲慢な気持ちから彼はまず目覚めたのです。他者に犠牲を強いずには生きられないということ、われわれ人間にはそんな逃れがたい罪があるのだということ、この罪意識の目覚めが、無自覚な人間が自覚的な人間に生まれかわる最初のステップなのです。そしてそれが信仰への扉となるのです。ゾシマ長老のこの宗教的経験、これは先にゾシマ長老の兄さんが経験したものであり、そして今回ドミートリが経験することになるところのものなのです。ドミートリの場合をもう少し詳しく考えてみましょう。彼は父親殺しの罪を（じっさいは無実なのに）どういうふうに認めたのか、そここのところの問題です。

#### ドミートリの罪の目覚め

まず、ドミートリが父親殺しの容疑で逮捕され、そこで受ける予審での彼の言葉を見てみましょう。これはこの作品を理解する上で非常に重要な一節です。

#### 【資料4】

みなさん、わたしたちはみんな残酷です、わたしたちはみんな悪党です、わたしたちはみんなのものを、母親や乳呑児を泣かせています。けれどその中でも、——今はもうそう決められたってかまいません、——その中でもわたしが一ばんけがらわしい虫けらです！それだってかまいません！わたしはこれまで毎日自分の胸を打ちながら改悛を誓いましたが、やはり毎日おなじ汚らわしい所業をくりかえしていたのです。が、今となって悟りました。自分のようなこういう人間には鞭が、運命の鞭が必要なのです。わたしのようなものにはなわをかけて外部の力で縛っておかなければなりません。自分ひとりの力では、いつまでたっても起きあがれなかったでしょう！しかし、とうとう鉄槌は打ちおろされました。わたしはあなたがたの譴責を、世間一般からの侮蔑の苦痛を引き受けます。わたしは苦しみたいのです、苦しんで自分をきよめたいのです！ねえ、みなさん、ほんとうにきよめられるかもしれないでしょう、ね？しかし、最後にもう一度言っておきますが、わたしはおやじの血にたいしては罪はないです！わたしが刑罰を受けるのは、おやじを殺したためではなく、殺そうと思ったためなんです。じっさい、危うく殺しかねなかったんですからね。

これを読んで、ドミートリが神への入り口のドアを叩く音が聞こえないでしょうか。無頼漢であったドミートリが咎人となった途端、それまでの無軌道な生活から急に罪というものを意

識し始める、つまり目覚めが起こるのです。自分は殺人の罪など犯していないと叫びたい。しかし同時に、ほんとうに罪を犯していないだろうかという反省が起こってくるのです。

じっさい、彼は物理的には父親を殺さなかった。その点では無実です。いわゆる法の裁きというのは実際に殺したかどうか、その事実だけが問題なのです。しかし、この作品はそういうことを問題にしているわけではありません。現実の裁判は二の次の問題なのです。ドミートリにとっては、父親を殺さなかったことは事実だけれども、殺したかもしれないほど憎んでいたことも事実なのです。殺そうと思ったことは事実で、そこが問題だったのです。そういう憎しみをもったことの恐ろしさに愕然とし、自分の罪深さに気づくのです。まさにこの点で、刑罰を受けなければならないと彼は思うのです。

その後あらためて法廷での裁判があるのですが、そこでもドミートリは全然裁判に参加していません。検事や弁護士が殺したか否か、動機は、証拠はと云って、激しく論争がくり広げられるのですが、本人はそんなことはもうどっちでもいいのです。彼の結論は「自分は殺していない、しかし罪は認める」、「無実だけれど罪はある」、これだけなのです。

こうして、彼は人間としての罪を認め、甘んじて天の鉄槌を受け、苦しんで自分を浄めたいと思うのです。これは非常に高いレベルの宗教的意識で、ゾシマ長老やその兄さんが改心した時の目覚めと同じものです。初めにゾシマ長老の兄さんが、次にゾシマ長老が信仰への入り口に立ったように、今ドミートリも真に信仰への入り口に立っているのです。

たった今、非常に高いレベルの宗教的意識という言い方しましたが、これがどういう意味でそんなに高度な宗教的経験なのか、そのこのところをもう一步進めてみますと、ゾシマ長老はいつも、わたしたちはだれでもすべての者に対して罪を負っている、だからみんなにゆるしを乞わねばなりませんと言って、人びとを説き聞かせます。ずいぶん平易な言葉づかいですが、ゾシマ長老のキリスト教者としての核心はここに集約されているとわたしは考えています。彼の兄さんの場合もそうでしたが、彼らが言う「ゆるし」は宗教的に非常に深い意味があるように思われます。

キリスト教では「ゆるしを乞いなさい、そうすればゆるされる」と説きます。キリスト教の真髄はこの言葉にあると思うのですが、その「ゆるし」とはどういうものなのでしょうか。

社会の法のもとでは罪がない者だけがゆるされるのであって、罪がある者は罰せられます。少なくとも罪が消えるまではゆるされることはありません。しかし、宗教では罪があるままでゆるされるのです。どうしてか。それは罪があると思うからです。つまり、自分の罪に気づいた者はゆるされるということです。こう言いますと、ずいぶん簡単に聞こえますが、自分の罪に気づくというのはたいへんなことです。罪があるとだれにも言われていないのに、自分から罪があると言うわけですから、これはだれにでもできることではありません。

さて、ドミートリですが、彼はそのたいへんなことをやったというわけです。自分は父親を殺していない、だから無実だと信じています。これは自分がいちばん知っていることで、これほどはっきりしていることはない。それなのに、はっきりと自分には罪があると気づくのです。これは宗教的にはもっともすばらしいことです。これがほんとうの信仰なのです。つまり、自分の心の中に神がいるという証しなのです。ドミートリはまさしくこの点で「ゆるし」を得たのです。

このことは、反例としてカテリーナを考えてみれば、よくわかります。彼女は自分に罪があるとはついぞ思ったことがありません。あくまでも公明正大だと思っています。それどころか、ドミートリを救ってやれるのはわたしだと自負しているくらいです。だから彼女の心の中にはけっして神は入ってこない。彼女にはいつまでも信仰への扉が閉ざされているのです。

### ドミートリの真実 — 人生の戦士

さて、話の詰めに入っていきたいと思います。作者ドストエーフスキは最終的にドミートリによって何を訴えたかったのか、これを考えてみましょう。

資料1と同じ場面に戻ってみます。ドミートリがカテリーナという婚約者がいるにもかかわらず、グルーシェンカに魂を奪われてどうしていいかわからないでいる、そういう心境を弟のアリョーシャにうち明けているところでしたが、ドミートリはつづけて次のように言っています。

#### 【資料5】

美——美というやつは恐ろしい、おっかないもんだよ！つまり、杓子定規にきめることができないから、それで恐ろしいのだ。なぜって、神さまは人間になぞばかりかけていらっしやるもんなあ。美の中では両方の岸が一つに出あって、すべての矛盾がいっしょに住んでいるのだ。おれは無教育だけれど、このことはずいぶん考え抜いたものだ。じつに神秘は無限だなあ！この地球の上では、ずいぶんたくさんのなぞが人間を苦しめているよ。このなぞを解くのは、ぬれずに水の中から出ろというようなものだ。ああ、美か！そのうえ、おれがどうしてもがまんできかないのは、美しい心とすぐれた理性を持ったりっぱな人間までが、往々マドンナの理想をいだいて踏み出しながら、結局ソドム（悪行）の理想をもって終わるといことなんだ。いや、まだまだ恐ろしいことがある。つまり、ソドムの理想を心にいだいている人間が、同時にマドンナの理想をも否定しないで、まるで純潔な青年時代のように、心底から美しい理想のあこがれを心に燃やしているのだ。いや、じつに人間の心は広い、あまり広すぎるくらいだ。おれはできることなら少し縮めてみたいよ。ええ、畜生、何がなんだかわかりゃしない、ほんとうに！理性の目で汚辱と見えるものが、感情の目にはりっぱな美と見えるんだからなあ。いったいソドムの中に美があるのかしらん？ところで、おまえは信じないだろうが、大多数の人間にとっては、まったくソドムの中に美がひそんでいるのだ、——おまえはこの秘密を知ってたかい？美は恐ろしいばかりでなく神秘的なのだ。これがおれにはおっかない。いわば悪魔と神の戦いだ、そしてその戦場が人間の心なのだ。

美というものが出てきて、ちょっと面食らいますが、これは愛と言っても、人生と言っても同じことです。この一節にドミートリの、ひいては作者ドストエーフスキの人生のとらえ方が凝縮されているように思われます。

普通、美というと、きれいなもの、崇高なものとだれもが考えます。それをドミートリは美は恐ろしいものだと言っています。どうして恐ろしいかと言うと、美には謎、秘密があるから

だと言うのです。ドミートリはいわば詩人ですからこういうふう言うだけで、あまり説明してくれません。

ドミートリの言いたいところを解釈するとこういうことだと思います。美とは高いところで不変に輝いているもの。気高くて、人間には犯すことのできないもの。人間の理想であって、わたしたちはそれに憧れ、志向するのです。植物が太陽の光に向かうように、美は人間の進むべき光なのです。人間はその美の理想をめざして、高潔な人間になろう、美しい愛に生きようと思って精進するわけです。疑ったり迷ったりする必要は何もないのです。

ところが、じっさいはそうじゃない。美は人を欺くのです。こうだと信じて進んでいくと、その先に逆転というか暗転があって、わたしたちは翻弄されるのです。しかも、美を求める心が切であればあるほど、この肩すかしは大きいのです。美というのはこういう恐ろしさを持っているとドミートリは言うのです。

それでは、美はどのように恐ろしいのか、言いかえれば美はどのように人間を欺くのかということですが、それを次に見ていきましょう。ドミートリはその謎をふたつの側面から述べています。ひとつ目は「美しい心とすぐれた理性を持ったりっぱな人間までが、往々マドンナの理想をいだいて踏み出しながら、結局ソドムの理想をもって終わる」というところです。

ここで言っていることはある意味ではよくあることで、高潔な心と高い知性を具えた人間でも、神のためだとか愛のためだとか言って高い理想から出発しながら、往々にしてソドムに終わってしまうのです。善を行いたい善を行いたいと思っていても、心の間隙について悪魔が現れ、つい悪を犯してしまうということで、これは非常によくわかります。漱石の『心』などもこういう罪を問題にした作品だと思いますし、要するに、人間はその半身である獣性をけっして超えることができないということです。これ自体としてはいわば文学おける共通テーマとなっていて、今のところそれほどドストエーフスキらしさを強調する必要はないかもしれません。それに対して、次のふたつ目の謎はもうはっきりとドストエーフスキ的です。「ソドムの理想を心にいだいている人間が、同時にマドンナの理想をも否定しないで、まるで純潔な青年時代のように、心底から美しい理想のあこがれを心に燃やしている」とドミートリは言っていますが、これはたしかに恐ろしい謎です。

「ソドムの理想を心にいだいている人間」とは、今言った人間の半身である獣性、それによって生きている人間のことです。悪党とか無頼漢とか、そういう輩は獣的な欲望がむき出しなわけです。ドミートリはまさにそういう人間です。ところが人間というのは、そういう欲望むき出しのままの姿で、つまり、ここが大事なところなのですが、欲望を克服しようとか、もう少し精進しようとか、そういう殊勝なことによってではなくて、ソドムの理想のまっただ中で、マドンナの理想に心を燃やすことがある、そんな矛盾が起こりうるのです。悪党のまま天使になろうとする、そういう純潔な魂が人間にはあるというわけです。美というやつはこういうふう人間を欺き、翻弄するのだ、これがいちばん恐ろしいとドミートリは言うのです。

先ほどの謎はどうだったのでしょうか。あそこは、マドンナの理想をめざして精進している高潔な人間でもソドムに陥ることがあるということでした。これだっていい加減恐ろしいことです。しかし考えて見れば、これは高いものが低いものになるということで、ある意味では理にかなっています。ところがこちらの方の謎はそれとはぜんぜんちがいます。マドンナもソドム

も、つまりミソもクソも、いっしょだということです。

どういうことかと言いますと、世の中というのは、マドンナはマドンナ、ソドムはソドムというふうに、ふたつが両極にあって、それによって善悪の秩序が成り立っています。少なくとも現実的にはそうです。マドンナの理想はより向上的で、ソドムの理想はより退廃的だというヒエラルキーです。そういう秩序があればこそ、人間は高い理想に燃え、より美しいものに憧れるわけです。ところが、人間の心の底ではそういう秩序が根本からくつがえされるのです。ソドムとマドンナという秩序の枠組がないということです。高いものも低いものも同じだということになるのです。ということは、人間の理想とか憧れというものは何の意味もなくなるわけです。美というのはこういう欺き方をしてわれわれを愚弄するのです。

さて、ドミートリですが、彼は今このクソミソの経験をしているのです。自分をならず者、ゴキブリのような人間だと思っています。婚約者を裏切って、元娼婦のもとに走るという自分です。裏切るということも悪いことだし、娼婦のような女のところに走るということも悪いことです。およそ褒められたことではありません。どう考えても自分はそんな卑しい根性なのだと思うのです。しかし、そう思えば思うほど、心の中ではそれとは裏腹に、グルーシェンカに惹かれることがすごく美しいものに思えるのです。彼女に恋をする自分の清らかさを感じてしまうのです。これが汚いものであるはずがないという実感があるわけです。その実感をどうしても抑えることができないのです。つまり、ソドムのまっただ中にあって、マドンナの理想に心を燃やすのです。

結局、ドミートリの本質はここに 있습니다。そしてこれがドストエーフスキの見究めた人間の二重性の本質だと思います。マドンナの要素をもっている人間がソドムの行為を犯してしまうという、そういう二重性だけではなくて、ソドムの要素とマドンナの要素が不可分の形で人間の深淵にあるという二重性、それが人間の魂のほんとうの姿なのです。

ドミートリはそういう人間として感じるがままに感じ、つくられたままに生きているのです。そしてそれが意識の世界ではソドム的な生き方になるのですが、いざとなると無意識的にマドンナ的な愛深さにつき動かされるのです。くり返しますが、けっしてソドムを乗り越えようとか、マドンナの理想に向かって精進しようとか、そういうふう生きるものではありません。とにかく、つくられたままにソドムの中で生きるのです。そしてそのソドムのまっただ中にありながら、そのままマドンナの理想を生きていくことができるのです。しかも、ソドム的であればあるほど、いっそうマドンナの理想に燃えることができるのです。言い換えれば、マドンナの理想を生きようとすれば、どうしてもソドムを生きなくてはならないということです。これがほんとうに神の道を行くことになるのです。ドストエーフスキの核心はここにるように思われます。ソドムに生きるということは神に近づくのにいちばん遠回りに見えるけれども、しかしこれしか神に近づく道はないのだということです。ドストエーフスキは日記のある箇所です。次のように言っています。

真理は、人びとの前に100年にもわたってテーブルの上に置いてあるのに、だれもそれを手にしようとはせず、ひねり出し、考え出されたものの後ばかり追っている。

真理とは神の道のことだと考えればよろしい。それはわれわれの目の前に（つまりこのソドム的人生のことですが）にちゃんと用意されているのです。それを人間は、やれ神学だの教会だの奇跡だのと言って、遠回りばかりしている。それではいつまで経っても神に近づけません。そうではなくて、人間はソドムに生まれついているということをまず知ることです。それしか人間の歩むべき道はないのだと、そしてそれが神への道なのだ、このことに気づくことが真の信仰の出発点となるのです。

こう言うとずいぶん簡単な話に聞こえますが、そうではありません。単にソドムを生きるだけなら、ヒョードルもやっていることです。では、彼も神の道を歩いたことになるのか。それはぜんぜんちがいます。大事な点はそれを真剣に生きるということです。グルーシェンカの場合もそうでしたが、つねに自分の魂を見つめ、その魂の真の希いに忠実に生きることです。そうすると、そういう生き方には驚くほど苦難が待っています。何しろそういう生き方は反社会的なわけですから。ソドムに生きるということはそのソドムの苦しみと哀しみを甘んじて受け入れなければならないのです。つまり、戦士でなくてははいけないのです。ドミートリはそういう人生の戦士としてソドムの苦しみと哀しみを生きる運命を背負わされているのです。

ここで思い出されるのは、ゾシマ長老が、ある時ドミートリの前に突然ひざまずいて、居合わせたみんなをびっくりさせるという場面です。すべての人の尊敬を集めている聖者ゾシマがもっとも卑しむべき、屑のような男に額づくわけですから、みんなが仰天するのも無理はありません。何がゾシマ長老にそうした異様な行動をとらせたのか、その説明がここにあるとわたしは思います。つまり、ゾシマ長老はドミートリの中にそういう運命と闘う尊い戦士を見たということです。ちょうど自分が戦ってきたように、ドミートリも自分の運命と戦っているのが彼にはよくわかったのでしょう。

さらに言えば、ゾシマ長老はドミートリに殉教者の宿命を見ていたのかもしれませんが。ソドムの苦しみの中で自らの魂の高さを守ろうとするドミートリはまさしく殉教者です。現に、彼はシベリア送りの判決を受けて、世間から追放されることになります。しかし、シベリア行きを申し渡された彼には追放された者の敗北感はありません。むしろ殉教者の晴れやかさがあります。いや、人間賛歌さえ聞こえてきそうです。ほんとうのゆるしを受けた者の魂の開放感です。

『カラマーゾフの兄弟』というこの作品はテーマも多岐にわたっており、さまざまな読み方があると思います。わたしはそれを人間の魂の救済問題としてとらえ、罪とは何か、ゆるしとは何かをいろいろ考えてきましたが、この殉教者の魂の解放、これがわたしの結論です。それをドミートリという登場人物に焦点を絞って導き出してみました。みなさんはいかがお考えでしょうか。今後機会があれば、この作品をじっくり読んで、みなさん自身の結論を導き出してください。

[本稿中の作品引用文は米川正夫訳（河出書房新社、1969）を借用したことを付記しておく。]